

① 神経分子機能

准教授：安藤 香奈絵 助教：斎藤 太郎・浅田 明子

認知、記憶、創造など、脳の高次機能は神経細胞の複雑なネットワークによって担われている。その機能は複雑な細胞内輸送とエネルギー代謝制御によって支えられ、それらの破綻は神経細胞死や神経変性疾患の原因となる。神経細胞の機能と構造はどのように維持され、またどうしたらストレスや加齢、疾患に対して神経細胞を守ることができるのか？当研究室では、神経の生理機能と神経変性疾患に特に重要な役割を果たすと考えられる微小管結合タンパク質タウとミトコンドリアの細胞内局在の異常に焦点を当て、分子生物学、生化学、イメージング、神経細胞培養、ヒト疾患のショウジョウバエモデル、動物行動実験などの様々な手法を用いて、分子レベルで神経細胞の機能とその疾患における変化を理解することを目指している。

現在の主な研究課題：

- (1) アルツハイマー病等の神経変性疾患におけるタウの代謝異常と毒性獲得のメカニズム
- (2) 神経細胞内のオルガネラ輸送・分布の制御メカニズム
- (3) 神経細胞内ミトコンドリア分布と神経細胞死の関係

② 発生生物学

准教授：福田 公子・高鳥 直士

動物の発生に内包されるプログラムのうち、初期発生、形態形成、器官形成における細胞分化機構と発生遺伝子の機能、発現制御機構について、分子生物学、組織化学、細胞生物学、形態学の技法を用いて解析を行っている。とくに脊索動物を主たるモデル生物として、内胚葉および消化管の分化に注目して発生プログラムおよびその遺伝子基盤の理解を目指している。

- (1) ニワトリ胚消化管の領域分化機構の解析
- (2) 有羊膜類の消化管形成時の細胞動態とそれに関わる分子機構の解析
- (3) 消化器官の境界形成の分子機構の解析
- (4) 脊索動物胚における中胚葉／内胚葉運命の分離に関わる細胞極性を作り出す機構の解析

③ 細胞生化学

教授：川原 裕之 助教：横田 直人

細胞内の機能タンパク質は、その誕生から成熟・消失の各プロセスで巧みなコントロールを受けている。これらのプロセスを担う中核システムであるユビキチン系が、細胞の恒常性維持や細胞周期制御などに及ぼすインパクトを解明する。いまだ未解明な点の多い細胞レベルのタンパク質代謝研究から、様々な応用研究へと新領域を開拓することを目指している。現在の主な研究課題は以下のとおりである。

- (1) タンパク質の品質を管理する新しいサーベイランスメカニズム
- (2) mRNA 分解システムが制御する新しい細胞周期調節機構
- (3) メンブレントラフィックを制御する新しい分子機構

- (4) 膜タンパク質の生合成を司る新経路
- (5) タンパク質凝集時の細胞応答と細胞死
- (6) タンパク質の合成と分解を標的にした分子細胞生物学

④ 細胞遺伝学

教授：相垣 敏郎◎ 准教授：坂井 貴臣 助教：朝野 維起・武尾 里美

先端的な遺伝学と分子生物学の手法を駆使できるショウジョウバエを使って、寿命、睡眠、学習、記憶、疾患に関わる遺伝子の研究に取り組んでいる。具体的な研究項目は、以下の通りである。

- (1) 寿命決定の分子機構
- (2) 性行動の制御に関わる遺伝子の機能解析
- (3) 卵成熟の分子機構
- (4) 学習・記憶の機構に関わる遺伝子の機能解析
- (5) 昆虫の変態に関する分子生物学的研究
- (6) 代謝疾患、および神経・精神疾患モデルの開発と応用
- (7) 睡眠の機構に関わる遺伝子の機能解析
- (8) 痛みの受容・知覚に関わる遺伝子の探索と機能解析

⑤ 分子遺伝学

教授：加藤 潤一 准教授：得平 茂樹

大腸菌を材料にして細胞増殖、生存機構を中心に、またシアノバクテリアを材料にして細胞分化制御機構などを、遺伝学、分子生物学、ゲノムサイエンス的手法などを用いて研究している。主な研究テーマは次の通りである。

- (1) 染色体大規模欠失株などを利用した機能未知遺伝子群の解析
- (2) 細胞増殖に重要な遺伝子群の同定と解析
- (3) 定常期の生存に重要な遺伝子群の同定と解析
- (4) プラスミドの接合伝達機構の解析
- (5) シアノバクテリアの細胞運命決定メカニズムの解明
- (6) 細胞分裂・脱分化抑制メカニズムの解明
- (7) 多細胞体の形成とその代謝統御の分子機構の解析

⑥ 植物発生生理学

教授：岡本 龍史 助教：古川 聡子

本研究室では、被子植物の生活環のうちで、次世代の個体を残すことに密接に関連する「受精、胚発生および種子形成」の過程に焦点を当て、実験発生学、細胞生物学、分子生物学、生化学、遺伝学など

多岐にわたる手法を用いて研究を進めている。特に、単離した卵細胞と精細胞を電気融合で融合させて受精卵を作出するという *in vitro* 受精系を主に用いて解析を行っている。材料としては、イネ、ムギ、トウモロコシなどを多岐にわたる。

主な研究テーマは以下のとおりである。

- (1) 受精卵の活性化機構
- (2) 受精誘導性・抑制性遺伝子の機能解析
- (3) 核融合の制御機構
- (4) 雌雄ゲノムの受精卵発生における機能差
- (5) 配偶子育種による新形質植物の作出
- (6) 胚発生および種子形成の分子機構

⑦ 神経生物学

准教授：黒川 信

無脊椎動物を中心に神経機構に関わる生理学分野を研究対象としている。内臓や体性運動の神経機構、行動の神経制御機構などを比較生理学の視点から研究している。現在、軟体動物（アメフラシ、ウミフクロウ、モノアラガイ等）、昆虫（カイコ等）、甲殻類（オオグソクムシ等）の心臓循環系、消化器官系、生殖器官系の中核および末梢神経系による神経支配について、電気生理学、免疫細胞化学などの手法を使っておもに単一ニューロンレベルで解析を進めている。

⑧ 進化遺伝学

教授：田村 浩一郎 准教授：高橋 文 助教：野澤 昌文

ショウジョウバエの環境適応に関わる遺伝子の作用機構および進化を研究している。また、種分化の遺伝的なプロセスを理解するため、遺伝学的実験、行動解析に加え、ゲノムレベルの発現解析や集団遺伝学的解析など、多面的なアプローチにより研究を進めている。さらに、ゲノム進化、分子進化に関する実験的、理論的、生物情報学的アプローチを用いた総合的な研究を行っている。主な研究テーマは以下のとおりである。

- (1) ショウジョウバエの環境適応に関わる遺伝子の分子進化、分子集団遺伝学的研究
- (2) ショウジョウバエを用いた種分化の分子機構の研究
- (3) ショウジョウバエを用いた性染色体進化の研究
- (4) ゲノムDNA塩基配列の分子進化に関する実験的および理論的研究
- (5) 分子進化・分子系統解析の方法理論とバイオインフォマティクスに関する研究

⑨ 植物環境応答

准教授：鐘ヶ江 健

環境情報、特に光によって調節される植物の形態形成（光形態形成）における植物の光センシング機構を、光受容（フィトクロム、ネオクロム、クリプトクロム、フォトトロピン）から信号伝達・現象発現にいたるまでの一連の過程として捉え、コケ植物から被子植物まで様々な植物材料を用いて解析を行っている。特に林床などに生育するシダ植物の弱光環境への適応機構に着目し、シダ植物に特徴的な光受容体の分子内・細胞内シグナル伝達機構や、光シグナルに応答した遺伝子発現制御の解析を進めている。また、シダ植物に特徴的な遺伝子群の解析により、高等植物とは異なるシダ植物の環境応答や生活様式の機構解明を目指して研究を行っている。暗所環境下における光生物学的実験のほか、分子生物学的、細胞生物学的、生理学的アプローチを用いて、細胞・組織・個体さまざまなレベルでの植物環境応答研究を進めている。

⑩ 環境微生物学

教授：春田 伸

微生物は地球上の物質循環や環境保全の面で極めて重要な役割を果たしている。本研究室では、土壌や河川、海洋、熱水など様々な環境における微生物の生理的・生態学的特性の解明を目指している。特に光合成細菌とそれと相互作用する細菌・アーキアの環境中での動態・機能に注目している。環境因子や個々の微生物の生理学的性質だけでなく、微生物間の相互作用を介した微生物生態系の機能・性質を包括的に捉えようとしている。

- (1) 環境浄化や環境保全に有益な新規微生物の探索、環境中での挙動。
- (2) 微生物複合系の機能およびそれを支える微生物の種間・細胞間相互作用。
- (3) 温泉微生物マットやバイオフィームにおける微生物群集の動態と物質循環機能。
- (4) 様々な環境における光合成細菌の多様性と環境条件による変動。
- (5) 飢餓等、非増殖状態の微生物の生理。

⑪ 動物生態学

教授：林 文男 准教授：岡田 泰和

本研究室では、小型哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、昆虫類、ダニ類、それ以外の無脊椎動物などの様々な動物について（陸生、水生を問わず）、生態、行動、進化、保全の研究を行っている。個体、個体群、種、群集、生態系の全てを対象とし、表現型可塑性、個体変異、個体どうしの相互作用、種分化過程、種間関係、生物多様性、生態系の物質経済学的的研究に関しても伝統的にこれまで多くの研究を行ってきた。研究手法に関しては、野外調査や野外における操作実験はもちろん、飼育下での観察や実験、分子マーカーを用いた解析、分子系統樹の作製、蛍光染色による顕微鏡観察、生理学や生態発生学、数理モデルの適用など、最新のものを常に取り込んで、多面的なアプローチに基づく実証的研究をめざしている。皆で議論しながら、各自が自由に研究できる雰囲気を大切にし、既成の枠に縛られることなく、

新しい考え方や技術などを積極的に取り入れている。個人研究を自発的に進められる人は言うまでもなく、最初はそうでなくとも、研究室には興味深い多くの未解決のテーマがあるため、それらの解明に興味をもってくれる人も大きな成果をあげられると思う。

⑫ 植物生態学

教授：鈴木 準一郎 助教：立木 佑弥

本研究室では、植物を中心とする生態現象をさまざまな時間的・空間的スケールで多角的にとらえることをめざしている。そのために、フェノロジー観察、植生調査、個体群統計、成長解析、野外実験、栽培実験、数理・統計モデル、コンピュータシミュレーション、遺伝マーカー解析、光合成等の生理的特性の測定などの手段を用いて研究を行っている。自然界で植物が繰り広げる生態現象の多様性を反映して研究内容も多彩である (<http://www.biol.se.tmu.ac.jp/plantecol/>参照)。対象としている植物も、シロイヌナズナなどのモデル植物や農業品種あるいは野生の草本植物、木本植物など多岐にわたる。温室・圃場や人工気象室を使った実験的な研究アプローチも重視している。また、保全生物学の研究にも取り組んでいる。入学者には、構成メンバーと生態学的興味を共有しながら議論し、積極的に研究を進めていくことが期待される。

⑬ 動物系統分類学

准教授：江口 克之 准教授：Adam L. Cronin 助教：清水 晃○

動物を対象とし、系統分類学、動物行動学、生態学、生物地理学、生物多様性情報学などに関する研究や、それらを組み合わせた学際的研究を行っている。野外調査を重視した研究だけでなく、飼育下での行動観察や、コンピューター・シミュレーションなどを重視した研究も可能である。

ベトナム、インドネシア、タイ、マレーシア、台湾、モンゴル、オーストラリア、フランスを含む海外の研究機関と共同で、国際的な研究プロジェクトを進めており、アジア諸国の若手研究者を留学生として積極的に受入れている。したがって、大学院生は海外で野外調査を行うことも可能である。

- (1) アリ類、カリバチ類、クモ類、その他の無脊椎動物などを対象とした、分類学的、生物地理学的研究。アジア地域における徹底した野外調査に基づいた研究。
- (2) 侵略的外来生物の生物地理学的研究。小笠原諸島や伊豆諸島における侵略的外来アリ類の防除プログラムへの貢献を目指す。
- (3) 社会性昆虫などの行動生態学、進化生態学。社会性昆虫のコロニーの集団行動、生活史戦略の進化。

⑭ 植物系統分類学

教授：村上 哲明 准教授：菅原 敬○・角川 洋子 助教：加藤 英寿

維管束植物ならびに菌類（キノコ類）を対象とした系統分類学的研究、およびこれと密接に関係する生物地理学的、進化生物学的研究を行っている。そのために、野外（国内のみならず海外も含む）での研究試料の収集、調査や観察などのいわゆるフィールドワークと DNA 解析などの実験室内の解析を組み合わせる研究を行っているのが当研究分野の特徴である。また、牧野標本館に所蔵されている植物の押し葉標本を広く活用した肉眼レベルから走査電顕レベルにいたる形態の比較に加えて、DNA 塩基配列や酵素多型などの分子解析、染色体などの細胞レベルの解析も活発に行っている。さらに海洋島である小笠原諸島における植物の適応放散現象の解析、昆虫と植物の相互作用の解析、植物の雌雄性分化に関する解析なども精力的におこなって、日本列島における植物多様性とその進化の総合的理解をめざした研究を行っている。

⑮ 神経分子機能

准教授：安藤 香奈絵

認知症は、脳の高次機能を担う神経細胞が次第に死んでいく疾患により引き起こされる。これらの進行性神経変性疾患の多くは加齢に伴って発症リスクが高まるため、社会の高齢化に伴い患者数が増大し、治療法が切実に求められている。根本的な治療法の開発と創薬標的の発見のためには、疾患の発症、進行がどのように起きるかを分子レベルで理解することが役立つ。当研究室では、短期間に多くの遺伝子の解析ができるショウジョウバエをモデルシステムとして主に用い、アルツハイマー病を含む複数の神経変性疾患について、発症メカニズムの理解と神経細胞死を抑制する因子の発見を目的としている。

現在の主な研究課題:

- (1) 神経変性疾患関連タンパク質タウの代謝異常と毒性獲得のメカニズム
- (2) エネルギー代謝異常と神経変性疾患の関係

⑯ 発生生物学

准教授：高鳥 直士

発生生物学の目的の一つは、胚発生により一つの卵細胞から多様な細胞が作られる仕組みを明らかにすることである。非対称細胞分裂は、細胞分裂によって生じた娘細胞が互いに異なる性質（発生運命）を獲得する現象で、細胞の多様化に貢献している。非対称細胞分裂を研究するには、異なる胚の間で細胞系譜に違いがなく（どの細胞が何になるか、胚の個体間で違いがない）、さらに細胞系譜が記載されていることが有用である。本研究室では、この条件を満たす海産無脊椎動物を材料に用い、非対称細胞分裂に先立ち、細胞内での mRNA、細胞内小器官の局在を作り出す仕組みを、*whole mount in situ hybridization* 法、免疫組織化学法、ライブイメージング法などの手法を用いて解析している。

⑰ 細胞生化学

教授：川原 裕之

ヒト細胞内の機能タンパク質は、その誕生から成熟・消失の各プロセスで巧みなコントロールを受けている。これらのプロセスを担う中核システムであるユビキチン系が、ヒト細胞の恒常性維持・免疫・細胞癌化・神経変性・糖尿病の防御などに及ぼすインパクトを解明する。いまだ未解明な点の多いヒト細胞レベルのタンパク質代謝研究から疾患防御の新機構まで、医療を含めた様々な応用研究へと新領域を開拓することを目指している。現在の主な研究課題は以下のとおりである。

- (1) ユビキチン系による免疫制御メカニズム（特に抗原提示について）
- (2) タンパク質品質管理の破綻がもたらす神経変性疾患発症の新機構
- (3) タンパク質品質管理の破綻がもたらす糖尿病発症の新機構解明
- (4) DNA 傷害チェックポイントを制御する新しい mRNA 代謝機構の解明と発がん防御
- (5) 免疫チェックポイント分子を制御する新メカニズム

⑱ 細胞遺伝学

教授：相垣 敏郎◎

- (1) 抗老化遺伝子の作用機構

ショウジョウバエを用いて、遺伝子の強制発現によって寿命を延長する効果を有する抗老化遺伝子を同定した。それらの中で、がん遺伝子 **Myc** の発現を制御する **RNA** 結合タンパク質に焦点を当てた機能解析を進めている。

- (2) 代謝・カルシウムシグナル・ミトコンドリア異常の病態モデル

ゲノム編集などの遺伝子改変技術を用いて、ヒト疾患のショウジョウバエモデルを開発する。代謝、カルシウムシグナル、ミトコンドリア異常に関連する遺伝子の変異体を作製し、その表現型を分子、細胞、個体レベルで解析する。

⑲ 分子遺伝学

教授：加藤 潤一

大腸菌は、分子生物学が誕生してから数十年間にわたって世界中の研究者が集中して研究してきたため、分子レベルで最もよく理解されている生物である。従って基礎研究の面では他の生物では難しい研究テーマを扱える研究材料であり、また応用面でも多くの物質生産の宿主などとして広く利用されている。この大腸菌について、これまで染色体広域欠失変異群、ゲノム縮小株などを作製してきたが、さらに進んだゲノム改変技術の開発、及び合成生物学的研究を行っている。主な研究テーマは次の通りである。

- (1) 大腸菌のゲノム改変技術の開発
- (2) 大腸菌における光合成機能の再構成
- (3) 酸化ストレス耐性機構の解析と改変

⑳ 植物発生生理学

教授：岡本 龍史

本研究室では、被子植物の生活環のうちで、次世代の個体を残すことに密接に関連する「受精、胚発生および種子形成」の過程に焦点を当て、実験発生学、細胞生物学、分子生物学、生化学、遺伝学など多岐にわたる手法を用いて研究を進めている。特に、単離した卵細胞と精細胞を電気融合で融合させて受精卵を作出するという *in vitro* 受精系により、異種交雑植物の作出や新規遺伝子組換え技術の確立することを視野に入れ、以下の研究テーマを進めている。材料としては、イネ、ムギ、トウモロコシなど、多岐にわたる。

- (1) 配偶子育種による新形質植物の作出
- (2) 受精卵・配偶子を用いた新規遺伝子組換え植物作出法の確立

㉑ 幹細胞制御学

教授：原 孝彦

造血幹細胞の発生・自己複製・系統決定の分子メカニズムを、ES/iPS 細胞の *in vitro* 分化誘導系や遺伝子改変マウスを用いて解明し、血液再生医療技術や白血病薬の開発に活用している。また、がん免疫や肥満性糖尿病に関与するケモカイン CXCL14 の作用機序を明らかにし、それを創薬に結びつける研究も行っている。主な研究テーマは以下のとおりである。

- (1) マウス ES 細胞や胎仔を用いた、造血幹細胞発生の分子メカニズム
- (2) ヒト iPS 細胞から、造血幹細胞や血小板を体外産生する方法の開発
- (3) 急性 T リンパ芽球性白血病に対する治療薬の創出
- (4) CXCL14 の生理的機能の解明と、その分子メカニズム
- (5) CXCL14 を利用した、がん免疫療法の開発
- (6) 超長寿ネズミのタンパク質品質管理機構

㉒ 蛋白質・オルガネラ分解機構

准教授：松田 憲之

当研究室は「ユビキチン修飾」「ミトコンドリア品質管理」「パーキンソン病」の3つを対象に研究を行なっている。これら3つの現象は独立した(無関係な)ものではなく、相互に深く関連している。実際に、我々は遺伝性パーキンソン病の原因遺伝子産物(PINK1/Parkin)の研究を通じて、PINK1/Parkin の触媒するユビキチン修飾がミトコンドリアの品質管理に必須であることや、この品質管理システムの破綻が遺伝性パーキンソン病を引き起こすことを明らかにしてきた。現在は以下の研究を行っており、これらの課題に挑戦してもらおう予定である。

(詳細は <http://www.igakuken.or.jp/protein/jpn/research/matsuda-team.html> 参照)。

- (1) 個体分子遺伝学を用いたパーキンソン病のモデルマウス・モデルショウジョウバエの確立
- (2) ミトコンドリアオートファジー(マイトファジー)機構の細胞生物学的手法を用いた研究

- (3) パーキンソン病の発症と関連するミトコンドリア品質管理機構の詳細な分子メカニズムの解明
- (4) 遺伝性パーキンソン病の原因遺伝子産物 DJ-1 の生化学的な機能解析
- (5) 生化学や細胞生物学の手法を駆使して、PINK1/Parkin とユビキチンの関係をより深く理解する

⑳ 行動遺伝生理学

教授：齊藤 実

記憶情報の獲得・保持・想起、及び短期記憶から長期記憶への統合に関与する脳神経回路を同定し、その動作原理をシナプス・分子レベルで理解すると共に、各種精神遅滞や加齢による記憶障害の発生機構を解明する。ショウジョウバエ、マウス、マーモセットといった動物の特長と記憶行動を生かし、リアルタイムイメージング、電気生理学的手法と分子生物学的、分子遺伝学的手法を組み合わせ現在以下のようなテーマの研究を行っている。

- (1) 学習記憶関連遺伝子の同定と分子機能解析
- (2) 学習記憶過程での神経回路、分子回路の動態解析と機能操作
- (3) ドーパミン、セロトニンなど多様な神経機能修飾を担う神経伝達物質の動作機序解明
- (4) 学習記憶における神経-グリア相互作用の役割の解明
- (5) 培養脳での人工的な記憶の形成

㉑ 分子老化制御

教授：石神 昭人

加齢に伴い私たちの身体機能は低下し、様々な故障も増加する。このような加齢現象の背後には身体を構成する様々な分子や臓器機能の変化が存在する。本研究室では、加齢に伴い発現が変化する種々の遺伝子群やタンパク質群を解析することにより、高齢者が有する身体機能の不全を早期に、しかも正確に検知し、抑制するための方法論の開発を目指している。主な研究テーマは次の通りである。

- (1) 1細胞解析による老化細胞の同定とその除去
- (2) 老化とビタミンC
- (3) アルツハイマー病診断薬の開発
- (4) 加齢指標タンパク質 SMP30 の機能解明
- (5) シトルリン化分子と老年病態

㉒ 植物成長制御

准教授：瀬尾 光範

植物ホルモンは、生活環の多くの場面で重要な生理作用を示す低分子化合物である。特に、種子の休眠と発芽、環境ストレス適応における植物個体としての生理過程に着目し、その制御機構を分子生物学、遺伝学、生化学、ケミカルバイオロジー、質量分析などの多面的な手法を用いて明らかにする。具体的

には、主にシロイヌナズナを実験材料として用い、アブシシン酸、ジベレリン、ジャスモン酸、オーキシシンなどの植物ホルモンの代謝（生合成と不活性化）と輸送の制御に関与する遺伝子を同定し、そのコードするタンパク質の生化学的機能と、植物体内における生理的な役割を明らかにする。また、植物ホルモンの働きを遺伝的、化学的に制御することで、作物の生産性や環境適応力を高める基盤技術の開発に取り組む。

- (1) 新たな植物ホルモン輸送体の同定と機能解析
- (2) 環境ストレス応答に関与する新たな生理活性物質の探索
- (3) 種子の休眠、発芽の制御機構の解析
- (4) 植物ホルモンなどの代謝物の高感度質量分析
- (5) 植物ホルモンの作用を制御する化合物（薬剤）の同定

②⑥ 光合成複合微生物

教授：花田 智● 准教授：Vera Thiel◎・Marcus Tank◎

光合成複合微生物系の主要構成者である光合成原核生物に関しては、その活用開発研究だけでなく、基礎的な研究も十分に進んではいない。光合成複合微生物系を構成する微生物相やその相互作用の解明を通じ、複合微生物系の安定化メカニズムを明らかにしていくことにより、エネルギー・環境問題の解決に資する光合成複合微生物系の維持・制御のための基礎的な技術開発や活用シーズの発見を目指す。主な研究対象となる光合成複合微生物系は温泉熱水中に見られる「温泉微生物マット」と貧栄養的な環境と考えられる清流中に形成される「川底微生物マット」である。研究課題は以下の三つに要約できる。

- (1) 光合成複合微生物系のひとつである温泉微生物マットの構成や形成機序、維持機構の解明
- (2) 酸素発生型の光合成を行う唯一の細菌であるシアノバクテリアの好熱性菌株のバイオリソース化、分類学上の整理と系統分類の確立
- (3) 川底微生物マット中に棲息する多様な好気性光合成細菌の分離培養と貧栄養環境下における生態学的役割の解明

注：連携大学院協定による客員教員の研究分野については、それぞれの客員教員に直接、または、それぞれの客員教員の分野に対応する本学の教員にお問い合わせください。（大学院博士前期課程または博士後期課程の募集要項「理学研究科指導教員・連携客員教員及び研究分野紹介」を参照）

理学研究科研究分野紹介の「生命科学専攻」において、研究分野の追加がございましたので、追記させていただきます。

②⑦ ケミカルバイオテクノロジー

教授：伊藤 嘉浩

生物工学（バイオテクノロジー）は、様々な分野で応用されるようになってきている。ただ、応用のためには化学的な修飾、あるいは合成物との複合化が必要な場合が多い。そこで、生命分子の成り立ちとなるセントラルドグマを応用した根源的な化学修飾から、進化分子工学、さらに生命分子の合成材料との化学的複合化までを行い、主に医療応用に向けた研究開発を行う。

- (1) 進化分子工学による診断・治療薬の開発
- (2) ドラッグ・デリバリーのためのナノキャリアの開発
- (3) 遺伝子工学、タンパク質工学と化学を融合した生命分子工学の方法論の確立
- (4) 生体材料、再生医療材料の開発